



Title	骨移植による歯槽形成に関する実験的研究
Author(s)	吉田, 龍三
Citation	大阪大学, 1970, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/30098
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	よし 吉	だ 田	りゅう 龍	ぞう 三
学位の種類	歯	学	博	士
学位記番号	第	1951	号	
学位授与の日付	昭和45年3月30日			
学位授与の要件	歯学研究科歯学臨床系 学位規則第5条第1項該当			
学位論文題目	骨移植による歯槽形成に関する実験的研究			
論文審査委員	(主査) 教授 河合庄治郎 (副査) 教授 川勝 賢作 教授 寺崎 太郎 助教授 奥野 善彦			

論 文 内 容 の 要 旨

補綴臨床上、有床義歯の維持、安定には歯槽堤の形態が非常に重要な意味をもつものである。この歯槽堤の形態を改善するための基礎的研究として、実験動物を用いてその歯槽堤に骨移植を行なった研究が2、3の先人により報告されているが、それらは骨移植後の変化を病理組織学的に追求したにとどまり、義歯にとって重要な歯槽堤の形態的变化は明らかにされていない。そこで、本研究はその基礎的研究の一環として、実験的に自家新鮮腸骨移植により歯槽堤の形態を改善した場合、その歯槽堤の形態がどのように変化するかを経時的に追求し、骨移植による歯槽形成に役立たせようとしたものである。

実験には、雄の成犬を使用し、まず、下顎両側小臼歯を抜去し、45日間放置した後、その歯槽堤上に自家新鮮腸骨移植による歯槽堤の形態改善を行なった。

歯槽堤の形態的变化を観察するため、骨移植後1、2、3、5カ月の各期間において、印象採得を行ない、石膏模型を作製した。この各期間の模型を一定の部位で切断し、切断面の規格写真を撮影し計測を行なった。この模型の位置規格および計測のための基準点として右側第3切歯切端、左右側第2大臼歯近心頰側咬頭を用いた。計測には、歯槽堤の形態の観察に必要な7点を計測点として選び、各期間における計測点の位置の移動を測定することにより、歯槽堤の高径、幅径の変化および歯槽頂の頰舌的な移動を経時的に観察した。各基準点、計測値の信頼性についても検討を加えた。なお、歯槽堤の高径、幅径については、骨移植後1カ月の値を基準として各期間におけるそれぞれの残存率を算出して、その変化を追求した。

実験の結果は、大要つぎのごとくであった。歯槽堤の高径については、骨移植後2～3カ月では比較的急激に変化するが、3～5カ月ではその変化は緩徐となり、ほぼ恒常状態を維持するような傾向がみられた。また、骨移植後5カ月では、1カ月の値を基準として、その約90%が残存

していた。つぎに、歯槽堤の幅径については、骨移植後2～3カ月までは急激に変化するが、3～5カ月ではその変化は緩徐となり、ほぼ恒常状態を維持するような傾向がみられた。また、骨移植後5カ月では、1カ月の値を基準にして、その約80%が残存していた。つぎに、歯槽頂の頬舌的な位置については、歯槽頂は、しだいに頬側へ移動してゆく傾向にあり、骨移植後5カ月では、1カ月に比べて、約1mm頬側へ移動した。

以上を要約すると、成犬の下顎小臼歯部に骨移植を行ない歯槽堤の形態改善を行なった場合、歯槽頂はしだいに頬側へ移動してゆく傾向がみられたが、この移動量は骨移植後3～5カ月では非常に小さくなった。また、歯槽堤の高径、幅径の変化については、骨移植後3～5カ月ではほぼ恒常状態を維持するような傾向がみられ、骨移植後5カ月では、1カ月の値を基準にして高径ではその約90%、幅径においてはその約80%が残存することを明らかにすることができた。

論文の審査結果の要旨

本研究は、骨移植による歯槽形成を研究したものであるが、従来、ほとんど行なわれなかった骨移植後の歯槽堤の形態的变化について重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は歯学博士の学位を得る資格があると認める。